

陶ら（東京大学海洋研究所）の「下水処理水が京浜運河の微生物群集に与える影響」では、水サンプルをろ過して採取した微生物群試料から DNA を抽出し、制限酵素末端断片長多型解析（T-RFLP）により地点間の微生物群集組成の類似度を計算した。その結果、表層と底層の微生物群集組成に大きなちがいがみられ、表層では下水処理水の影響を受けた微生物群集が形成されていることが推定された。新たな手法を用いた微生物群集構造の解析であり基礎的研究として重要であるが、解析結果を下水処理水の影響評価や管理にどのように結びつけていくのかが見えてくると研究の意義がわかりやすくなると思われた。

赤津ら（荏原環境エンジニアリング）の「お台場海浜公園におけるふん便性大腸菌群集と降雨量の関係」では、今まであまり報告されてこなかった下水処理場からの降雨時越流水の問題が取り上げられた。降雨時にはふん便性大腸菌群数が増加する傾向がお台場でははっきりみられ下水処理場からの越流水の影響が大きいことが示された。

児玉ら（水産総合研究センター中央水産研究所）の「河川流量の制御による内湾環境改善の可能性に関する検討」では、河川流量を制御して貧酸素水塊やノリ養殖場への影響塩供給量をコントロールできないか水質モデルを用いた検討結果が示された。現実的に可能かどうか少々疑問もあるが、研究の着眼点としてはおもしろいと感じた。

日村ら（佐賀大学）の「泥干潟における懸濁物質の動態に関する研究」では、干潟における潮の上げ下げに伴う懸濁物質と栄養塩の動態を細かく調査しており、基礎研究として貴重なデータを示していると感じた。

国分ら（三重県科学技術振興センター）の「英虞湾内人工および天然干潟における直上水の水質変動の連続観測」では、浚渫ヘドロを用いた人工干潟における物質動態の調査結果が示された。干潟では懸濁態有機物が捕捉され、溶存態無機栄養塩が溶出する物質収支となっていることが示された。

このセッションでは地方行政機関が関与した研究が多かったこともあり、行政課題に答えようとする研究、また、現地調査に重点をおいた研究が多く、個人的には好感が持てる研究が多かった。

（滋賀県琵琶湖環境科学研究セ 大久保 卓也）